

認知症が進み白内障の手術ができない高齢者の不安解消に向けての支援 ートイレでの立ち上がり動作の声かけー

学籍番号 17 cc 05

学生氏名 小野田なつみ

I. はじめに

A 様は白内障で認知症の進行状況から手術はできないと判断され、現在、光は感じられるが色は認識できない状態である。そのため、「見えないからできない」との発言が見られ、自分に自信が持てず、不安を感じやすい方であった。トイレでの立ち上がり動作場面において A 様のもつ現存機能を活用し、声かけを工夫した結果を報告する。

II. 実習先種別・実数期間

実習先種別：介護老人福祉施設

実習期間：2018 年 6 月 25 日～2018 年 7 月 27 日（うち 23 日間）

III. 受け持ち利用者の紹介

氏名：A 様 性別：女性 年齢：90 代前半

介護が必要になった主な疾患・障害：認知症、白内障

排泄：トイレ誘導、リハパン・パット使用、利尿剤服用、トイレへの訴え多くみられる、手すりを握り立ち上がりが可能だが下肢筋力の低下により立ち上がりが困難となってきた、腰の痛みを訴えることがあり不穏になりやすい。

余暇時間：日中リビングで隣の利用者様と会話しているか、うたた寝をしている。

IV. 介護の実際

情報の解釈・関連づけ・統合

白内障を患っており、認知症の進行から手術は出来ないと判断され、現在、光は感じられるが色の判断は難しい状態で「見えないからできない、私ここにいたら邪魔だね」と自虐的な発言が聞かれた。また、一日のほとんどをリビングで過ごし、隣の利用者様と話しているか、うたた寝をしている。このことから、弱視という点で自分に自信が持てず、意欲の低下に繋がっているのではないかと考える。

介護上の課題：役割を持つことで達成感や充実感を味わい、弱視である不安を解消し穏やかに過ごすことが必要である

介護計画

長期目標：役割を持ち自分に自信を持つことで穏やかに生活できる

短期目標：自分で出来ることを行っていただき、達成感を味わうことができる

具体的援助内容

○トイレで手すりをしっかり握って立ち上がっていただく

- ・立ち上がりを安定させるため浅く腰掛け、前傾して手すりを握っていただく
- ・ズボンの上げ下げを行う間、後ろを支え、動作毎に声掛けを行う事で不安を軽減する
- ・終わった後、協力していただいたことへの感謝の気持ちを伝える

実施及び結果

<7月16日> 浅く腰掛け、前傾して手すりを持っていただくよう声掛けしつつ、手の誘導を行った。後ろを支え、声掛けするも、動作に手間取ってしまい不安と立つことの疲れから「困ったやあ、怖いや」との発言があった。

<7月18日> 前回と同じように声かけし、支える際は前回よりも声かけをこまめに、動作はスムーズに行うことを意識して、前回と同様感謝を伝えると謙遜はされたものの、穏やかな表情であった。トイレ誘導後、「手すりをしっかりと握り、立ち上がっていただいたおかげで助かりました」と伝えることで謙遜はされるが、表情が穏やかで「助かった」との発言が見られた。

以上のことから、短期目標である自分でできる事を行っていただき、達成感を味わうことができるについてほぼ達成することができたと考え、長期目標である役割を持ち自分に自信を持つことで穏やかに生活できるに近づけたのではないだろうか。

V. 考察

坂本は(2015)「中途視覚障害の多くの人は、肉体的な打撃である視覚障害という事実に対して精神的に大きな打撃を受けます。」¹⁾と述べている。A様は弱視ということから自分ができることを気にしており、これに該当していた。

トイレ誘導中、不安な発言は見られず、「助かったや」との発言が見られ、穏やかな笑顔を見ることができたのは、立ち上がり動作の支援をスムーズに行い、感謝の気持ちを伝えたことで、A様に役に立てたという気持ちを持っていただけたからだと考えられる。

VI. おわりに

弱視で生活に不安を持つ利用者様と関わり、周りの状況が把握できない恐怖や今まで行えていたことが困難となる苦しみを受け止め、現存機能の活用で、できる事を行っていただき、感謝の気持ちを伝えることで自信へと繋がり、不安の解消になるのではないかと考えられる。今後は、不安解消の方法について学び、介護現場でも活かしていきたい。

引用・参考文献

- 1) 坂本洋一 (2015)「新・介護福祉士養成講座 13 障害の理解」中央法規 p. 52